ARTIST FELLOWSHIP 2024 activity report

2024年度 ACY アーティスト・フェローシップ助成 活動報告書

鎌田 友介
トークイベントの様子（2025年1月、ARUNŌ）

工藤 春香
「わたしたちがいるために」（2025年1月、左近山アトリエ131110）
Photo：西山功一

アーツコミッション・ヨコハマ

INDEX

2024年度の活動について

04 2024年度申請概況

05 申請内訳

審査講評

アーティスト・フェロー

10 鎌田 友介

16 工藤 春香

22 敷地 理

28 永田 康祐

34 野村 眞人

2024年度総括

40 公募概要

41 2024年度振り返り

42 ACYアーティスト・フォローアップ助成

ABOUT ACY

アーツコミッション・ヨコハマ（ACY）は、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が運営する、芸術やデザインにおける社会連携、地域連携を進めるプログラムです。芸術やデザインを軸に横浜各地で共創、協働を生み出す中間支援活動を行っています。
専門人材や地域住民とのネットワークを築き、横浜の環境・歴史・文化を読み解き、芸術やデザインを市民の身近にすることで、人を惹きつける新たな価値を創造しています。

ARTIST FELLOWSHIP

アーティストのキャリア形成を
資金・人的・広報で支援するプログラム

ACYアーティスト・フェローシップ助成は、アーティストを育成し、そのキャリアアップを支援するための助成制度です。
日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動にはげむアーティストを対象とし、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場所の獲得など、アーツコミッション・ヨコハマが伴走的支援を行いました。
また、アーティストの活動場所として横浜の各地域の可能性を探る試みとして、助成に採択されたアーティストが横浜市内で滞在を行いました。

OUTLINE

2024年度申請概況

本プログラムは、アーティストの育成とキャリアアップを支援する助成制度として、2016年度に開始されました。制度名称や内容を変更しながら、今年度で9回目を迎えます。日々新たな表現を追求し、構想を磨き、創作活動に励むアーティストを対象とし、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場の獲得など、アーツコミッション・ヨコハマの伴走的支援を通じてキャリアアップを目指すことを目的としたプログラムです。

本助成プログラムの特徴の一つに、「横浜市内の拠点での滞在および活動の実施」があります。横浜の風土、歴史、文化を調査したり、滞在を通じて地域の人々と会話を交わし、交流を深めたりすることが、作品の成熟や創作アイデアの発見につながるのではないかという考えのもとで設定しました。その結果、多くの申請者がこれに応答し、横浜の環境を活かした提案を行いました。日本各地や海外からの申請も多く、さまざまな都市からの横浜へのまなざしは非常に興味深いものであり、横浜の創造環境の可能性を改めて感じさせるものでした。

また、本助成はもともと若手アーティストの支援を目的とし、年齢制限を設けていましたが、2023年度より年齢制限を撤廃しています。その結果、幅広い年齢層から申請が寄せられました。若手アーティストだけでなく、中堅・ベテランのアーティストからの申請も多く、支援を必要とするタイミングは年齢だけで判断されるものではなく、さまざまな要因によって異なることを改めて認識する機会となりました。

今年度は110件の申請があり、審査員による一次選考（書類選考）と二次選考（面談選考）を経て、5件を採択しました。しかし、アート・プロジェクトや公演など、多くの関係者を巻き込む多様な形式の活動が想定されるなかで、助成金額が限られている点は今後の課題として認識しています。

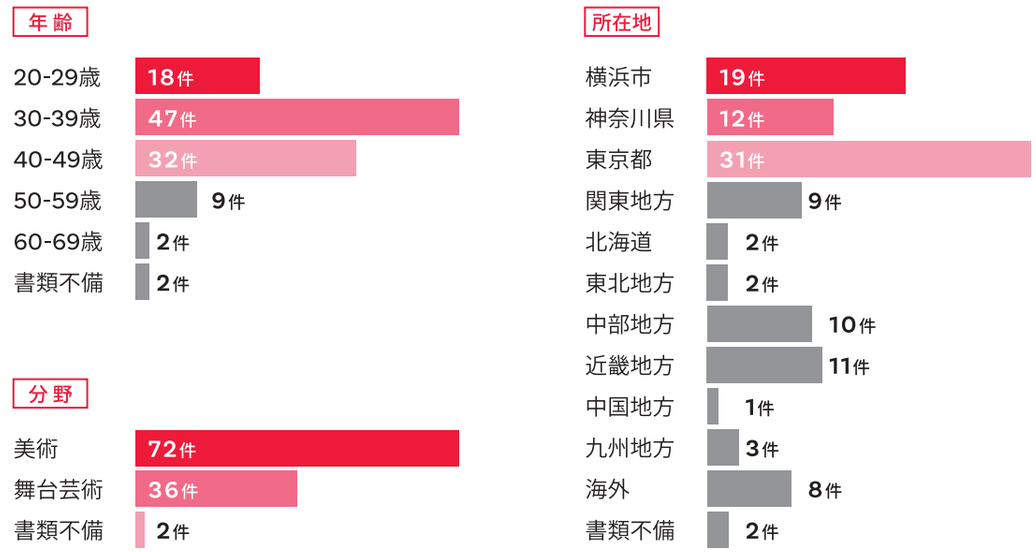
助成審査会は、5名の専門家による審査員で構成され、書類・面談を通じた評価に基づき、以下の審査基準（4つの評価項目）をもとに選考を行いました。

審査基準

趣旨理解	助成趣旨を理解した提案になっているか。
独自性	芸術としての手法や形態、また思想や題材等、優れた発想や独自性を有しているか。
地域性	横浜で滞在をしながら創作または発表することの意義を有しているか。
実現性	計画および資金使途が明確であり、活動規模やスケジュールが適切か。

申請内訳

総数：110件



審査講評

敬称略／五十音順

天野 太郎

東京オペラシティ アートギャラリー　チーフ・キュレーター

昨年度に続き、ACY アーティスト・フェローシップ助成の審査に参加した。審査講評は、1回目の成果をもとにすることが出来たのは非常に参考になった。市内の幾つかの地点をレジデンスの対象としている点が特徴的なプログラムであり、それを十分に活かせた成果だったからだ。

今回も二次選考に残ったアーティストの提案は非常に幅広く、横浜の地域性を意識したものが多かった。この地域性を活かすと言うことだが、ある意味で非常に抽象的な言い方にもなるのだが、地域の人々との協働もその内容に広い幅がある。モノとしての作品を最終的な成果とすることのみならず、あくまでも過程（work in progress）を経験し、継続的なプログラムとして地域に残していくという方法もある。また、提案するアーティストが、そのテーマの当事者である場合もあれば、言わば地域にやってきた漂泊の人という場合もある。それぞれ立場が異なるものの、アーティストと地域住民が日常の風景の中にそれぞれ新たな発見、気づきで結ばれていくことに変わりはない。

また、横浜に限ったことではないが、日本の都市は異文化を背景とした多様な人々の共生の時代を迎えつつある。無論、その背景には、少子高齢化に伴う地域社会の再構成が意図されているが、新たな住民のみならず、すでに世代を重ねている住民の歴史的、文化的背景の多様性も十分に意識すべき事柄だろう。今回は、こうした視点も十分に念頭にいれた提案が多く見られ、個々のプログラムを通じて、横浜の新たな様相が浮上することも大いに期待したいと感じた。

COMMENT

岡本 純子

公益財団法人セゾン文化財団　シニア・プログラム・オフィサー

舞台芸術の有識者として2年目の審査員となった今回は、舞台芸術のアーティストを2名採択することを目標として審査に臨み、それがかなったことをとてもうれしく思っている。

一方、一次選考では、作品の独自性を最重視し、着実にレベルアップし続け、活動の場を広げ、客観的な評価も得ている方を高く評価したが、大変残念ながら全員二次選考に進むことができなかった。

今回は審査基準に「【地域性】横浜で滞在をしながら創作または発表することの意義を有しているか。」が加わったが、申請書から、「1.その点を意識し、かつ説得力を持つ内容となっている人」、「2.意識はされているが、十分な説得力があるとは言いがたい人」、「3.あまり意識されていないと思われる人」に分かれ、当然ながら、1.の人が高い評価を得る傾向にあった。

また、【提案内容】として、「ACY が指定する横浜市内の拠点での滞在（最短6泊7日）」「地域住民と交流する活動（公演、展覧会、試演会、ワークショップ、トークイベントなど）」が求められているため、実質的に、ACY アーティスト・フェローシップ助成＝横浜での滞在制作および地域住民との交流、となったと言える。自らの創作上の関心を上手く助成内容に結びつけ、キャリアップの機会とできる人向けの助成と言えよう。自身の関心と横浜をすぐに結びつけるのが難しかったら、指定の滞在拠点や周辺地域をリサーチしてから提案内容を考えてみてもよいのではないか。5つの滞在拠点は、立地場所も拠点の個性も運営者の方々も様々なので、それらを踏まえて活動内容を考えれば、自ずと説得力ある内容になるのではないか。今回、採択に至らなかった方々にも、自らの視野やアイデアを広げる機会としてもACY アーティスト・フェローシップ助成を活用し、キャリアアップを図るべく、再度挑戦していただければと思う。

野上 絹代

振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師

昨年度から審査員を務めておりますが、前回よりも助成金の趣旨を理解し、横浜市でレジデンスをする意義がしっかりと考えられている方が多かったように思います。その点において、非常に悩ましい書類選考になりました。ただ、100名を超える作家の皆さんの活動やコンセプトに触れる機会は私にとってとても貴重で、たくさんの刺激をいただき有意義な審査期間となりました。ご応募いただいた皆様、ありがとうございます。

舞台芸術ジャンルは作品コンセプトや自身の作家性を、説得力をもって自ら言葉にする機会が少ないからか、書類では良さが半分も伝わらないのでは、という方も見受けられました。その中にあって一次選考を通過された方々は舞台芸術以外の審査員にも伝わる独自性とレジデンスの意義を強く信じさせてくれる活動計画だったと思います。

二次選考で感じたのは書類とは受ける印象の違う方が多かったということです。この助成金はレジデンスを通じて市民との交流を経て、アーティストとしてのキャリアに活かしていただくということを重要視するものです。ですので、面談時のやり取りから、アーティストとしての強さと柔軟性の両面を持っている方が結果的に助成対象に採択されたと感じました。

採択された5名の方の横浜市での活動に期待しています。また、今回採択に至らなかった方々も今一度、助成金の趣旨をご理解いただき、またご応募いただければと思います。

長谷川 新

インディペンデントキュレーター

100件を超える応募書類を吟味することは未然の作品にひとつひとつ立ち会うようなとても貴重な経験でした。応募していただいた方々に心から感謝いたします。

講評に際して、大前提として書いておくべきだと思うのですが、この公募は求められる実践が数としても質としても高水準で、また多岐にわたるようになっています。言い換えれば、この予算と応募条件が、（例えば素材や、共同制作者の人数など）表現を規定する側面があるということです。また、作品の成熟や創作アイデアの発見を促すキャリアアップ支援という公募の性格もあり、少なくない応募者が計上可能である「企画料」を0円で計上していました。

高水準の調査（もはや単なる美術実践における貢献や作家個人の変容にとどまらず、学問的にも、ある種のアカデミア空間においても資するような社会実践）を伴う制作案がいくつもあり、結果としてそうした性質を持つ応募プランが全体において高い評価を得ています。今年はそこに賭けた、と私自身は考えています。いずれも、今回の滞在制作がとても楽しみですし、今回で終わらず、或いは今回をパイロットとして、より発展的に続いていってほしいなとも思っています。応募プランの中には本当に魅力的なものがたくさんありました。横浜を使い倒すプランもあれば、ひとつの休憩地や経由地として横浜を捉え返すようなプランもあり、或いは横浜である必然性は薄いもののそれ自体が抗しがたい魅力を放つものもあり、分厚い地層に押しつぶされそうになるような感覚を覚えました。

おそらく試され、求められているのは審査員の側であり、制度の側であり、行政の側なのだと思います。高騰する物価、コミュニケーションを必須として立ち上がっていく設計、セルフプレゼンテーション能力、年齢や生活環境との折り合い。作家の多くはそうした点を言い訳にすることなく、ひとつの条件として受け止め、自分がやりたいことを言葉にし、数字にし、声にしていたと思います。運営する側もまた現在の条件の中でベストを尽くそうとされています。審査した側としては、採択された方々の実践をみることを心から楽しみにするとともに、これからなされる出来事から何を汲み取り、自分が何を果たすのかを考えたいと思います。あらためてありがとうございました。

藤原 徹平

フジワラテッペイアーキテクツラボ代表、横浜国立大学大学院Y-GSA准教授

ACYのフェローシップは、美術分野や舞台芸術分野、あるいはそのどちらとも言えないような多様なアーティストからの申請がある。昨年から対象年齢制限がなくなり、当然ながらすでに自分なりの方法論なり、キャリアを築かれている方からの応募が増えた。

すでにある程度キャリアがあるアーティストに対しては、このフェローシップでどのような変化を得ようとしているのかを重視して審査をした。また逆に、若手のアーティストには、このフェローシップで飛躍をしていくような転換点を求めるベクトルを期待した。

昨年度の成果発表では、横浜の郊外部の拠点でアーティストが滞在し、生活し、活動をする。そのことの可能性と面白さがよくわかった。薪で風呂を炊いたり、食事会をしたり、話を聞いたり、なんてことない日々の行為から多様な化学反応が生まれていた。

その意味では今年の申請書の多くは、横浜での計画が真面目に練られ過ぎているように感じた。

横浜は、港町であり、国際都市であり、多国籍都市であり、広大な郊外部を抱えた現代社会の縮図であり、近代化の多様な歴史の層が重なる都市でもある。

リサーチなのか制作なのか上演なのか、あるいは創造的な思考のための逍遥の場なのか。アーティストの計画とは、もっと自由で感覚的なものであっても良いのかもしれない。審査をしていてそのように感じた。

審査員間で今年も充実した議論ができた、その結果、予測不能で面白い応答が起きそう。そのような期待感を持てる5人が選ばれたように思う。

ARTIST FELLOW SHIP 2024

鎌田 友介
工藤 春香
敷地 理
永田 康祐
野村 眞人

鎌田 友介

Yusuke Kamata

滞在①　12/17（火）～ 12/23（月）@ARUNŌ
調査　12/24（火）～ 12/27（金）@ソウル
滞在②　12/28（土）～ 1/8（水）@横浜
トーク　1/6（月）@ARUNŌ

トークイベントの様子（2025年1月、ARUNŌ）

活動概要

鎌田友介は新作に向けて、原三溪および三溪園に関してのリサーチを、横浜と韓国を中心に行いました。ARUNŌ滞在時には、横浜開港資料館や横浜市中央図書館などでの文献調査に加え、三溪園の古建築や蒐集した美術品について調査。また、韓国では、1918年に朝鮮の首都京城（現ソウル）に設立された朝鮮農林株式会社に関する調査を実施しました。
リサーチの内容をまとめて共有するトークイベントでは、専門家も交え意見交換し、作品制作に向けて活動を進めています。

三溪園リサーチの様子
Photo：鎌田友介

韓国でのリサーチの様子「韓国の日本家屋」
Photo：鎌田友介

滞在拠点

ARUNŌ -Yokohama Shinohara-

Photo：Charlotte Raymond

プロフィール

美術家。歴史や社会の状況を反映するとともに、国家の文化やアイデンティティ形成のツールにもなる建築をテーマに美術と建築を横断する活動を続ける。近年は日本占領下の韓国や台湾で作られた日本家屋やアメリカ合衆国で焼夷弾実験のために作られた日本村の設計などの調査を通し、異なる歴史的背景と場所において日本家屋が孕んだ多様な意味を描き出すプロジェクトを手がける。近年の主な展覧会に「ホーム・スイート・ホーム」（国立国際美術館、2023年）など。

原三溪が生まれた岐阜でのリサーチの様子
Photo：鎌田友介

Q1　どのような活動をしていますか？

「The House」というプロジェクトをメインに進めています。日本統治時代の韓国や、移民政策時期のブラジル、戦時中のアメリカなどで建てられた、国外の日本家屋・建築をテーマにしたプロジェクトです。それらが建てられた歴史的背景や目的、構造の違いなどをリサーチし、文化やアイデンティティを捉えなおす作品を発表しています。

今回、僕にとってはチャレンジングで、フェローシップ助成をきっかけに始めようと思ったプロジェクトに取り組みました。根底にあるテーマは普段と大きく変わりませんが、三溪園の創設者として知られる原三溪にフォーカスしています。横浜で文化の保護や経済に関わりながら、様々な芸術家を支援し、日本近代美術に大きな影響を与えた人物です。僕自身、美術・芸術と政治との絡み合いをテーマにしていてので、パラレルに同時進行していることが興味深いと思っています。

韓国でのリサーチの様子「朝鮮農林株式会社 事務所跡地」

Q2　この助成をどう活用しましたか？

当初は作品の発表まで想定していましたが、審査員の方と話していく中で、発表を焦らずにリサーチに重点を置くことになりました。取り組んでいるテーマがセンシティブなものが多いので、普段からリサーチに時間をかけていて、そこを理解していただけてほっとしました。

滞在中は、横浜開港資料館などで文献を徹底的に調査することから始めました。あわせて、研究者に話を聞きにいったり、三溪園に通い、庭園や家屋、美術品をみる1週間を過ごしました。

その後、韓国に渡航し、原三溪が首都京城（現ソウル）に設立した朝鮮農林株式会社の跡地や所有していた土地を見て周り、日本人街がどのように形成されていったかなどを調査しました。

滞在先のARUNŌで、調査の中間報告会を開催したのですが、そこでは三溪園保勝会の方や、韓国の建築を研究されている建築家、横浜美術館の学芸員など、多くの方々と話す機会になり、多くのものを得られました。

トークイベントの様子（2025年1月、ARUNŌ）

Q3　横浜の滞在・活動で得たものは？

現地で調査をすることでみえてきたものが沢山ありました。実際に三溪園で目の当たりにした美術品のセンスもそうですし、いま三溪園に関わる方の感情的な部分などは会って話してみないと知ることができないものでした。制作をする態度として、こういった感情面も受け取ること、常に気にしていないといけないことだと改めて実感しました。

滞在先のARUNŌを運営している建築家の若林さんと様々な話をできたことは貴重な時間でした。原三溪が収集していた古建築と現代の建築の断絶など、深いテーマで意見を交わすことができましたし、普段は美術家と話すことが多いので、建築家と話せたことは新鮮でした。

トークイベントのときにお会いできた方々とも、これからの約束ができました。それぞれ原三溪に対して持っている視点が違うため、今後も多角的なインプットができると思っています。

かつて原三溪が所有していた古建築
Photo：鎌田友介

Q4　今後の展望を教えてください。

原三溪にまつわるこのプロジェクトは、フェローシップ助成での活動が本当のスタート。今後も定期的に横浜に通い、調査を継続して作品をつくりたいです。作品は横浜、そして韓国でも発表したいと思っています。物事を多角的にみることも自分のテーマのひとつなので、展示する地域が変わることでどう反応が変わるかもみてみたいです。

地元が横浜で、一時期横浜にも事務所を構えていました。そのときからの建築家やアーティストとのネットワークもあるので、今回できたネットワークをあわせて、それらを活用できるプロジェクトができたらと思っています。

また、作家として、現代美術というフィールドのなかで効果があるというより、実際に社会にエフェクトがある作品をつくりたいです。建築をテーマにするのは、色んな人と話したいという理由もあり、消費で終わるのではなく、実社会に対して影響が生まれる作品をつくっていきたいと思っています。

Photo：大野隆介

拠点からのコメント

ARUNŌ -Yokohama Shinohara-

新横浜駅近くの旧横浜篠原郵便局を活用した文化複合拠点。「未知への窓口」をコンセプトにしたシェアスペースやカフェ、ポップアップテナント等からなる施設。

Q1　今回期待したことを教えてください。

　このフェローシップ助成は、アーティストが滞在期間に成果を出さないといけない訳ではないため、長期的な関わりを見つけることができると思っています。短期的にまとめるよりも、そのつながりが今後の価値になっていくと感じています。

　私たちが場所を開いて活動していても、すくいきれないものがあって、アーティストが来てくれることで流れが変わるんです。新しい人がきてくれたり、新しい発見があったり。

　また、アーティストの視点でこの地域をみた時に、どういうことを感じるのか。僕らにない視点のものが聞けるのも嬉しいです。

Q2　アーティスト滞在で得られたものは？

　建築家なので、原三溪や日本家屋について話せたことが有意義でした。ちょうど三溪園の近くでリノベーション案件が進行していて、私もリサーチをしていたので、共通体験を得ることができました。その施設が完成したら、鎌田さんにも展示してもらいたいと思っています。

　また、新横浜にはアートや文化的な側面がほとんどないのですが、鎌田さんはアクセスもよく、大きな場所を借りやすく、良い立地条件だとおっしゃっていました。滞在中に話をするなかで、離れた場所にいるアーティストやクリエイターが集まるコミュニティをつくるには良い場所だという視点をいただきました。私たちももっと新横浜を面白くしていきたいので、今後も情報共有していきたいと思います。

話し手：若林拓哉
（ARUNŌ -Yokohama Shinohara-／
株式会社ウミネコアーキ）

拠点滞在中の様子

2024							2025	
6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
拠点と顔合わせ（オンライン） ヒアリング						韓国調査 拠点滞在	トークイベント	岐阜調査
米子市美術館での個展について広報協力					滞在サポート 拠点との交流会		トークイベント運営サポート 三溪園関係者を紹介 横浜美術館学芸員を紹介	

レビュー

藤原 徹平

　鎌田友介は、日本建築への多面的な考察から意欲的に作品をつくり続けている。多面的というのは、例えば＜空間と光＞というような現象的な特徴に焦点を当てたものから、移民や植民地政策によって日本国外に存在する＜日本家屋＞というような地政学的な面に焦点をあてたものまで、多くの視点を含む。

　今年度の助成内容は、鎌田の日本建築への興味の原点とも言える原三溪について、＜文化的ナショナリズム＞の視点から調査を掘り下げるという内容だった。生糸貿易で巨大な財をなした原三溪（本名：富太郎）は、大量の文化財を蒐集した稀代の美術コレクターであり、多くの芸術家を支援した文化的パトロン、優れた日本建築を移築保存し自らの邸宅庭園を作庭していった先駆的な総合芸術家、関東大震災からの復興に尽力した篤志家として知られる。

　鎌田が具体的に実施した調査は、原三溪が韓国ソウルに広大な土地を所有し、都市開発をしていたというあまり知られていない史実についての調査を核とする。

　鎌田の興味は、＜文化的ナショナリズム＞と＜植民地政策下の日本の政治や権力＞とが、どのように結びついているかを明らかにしたいという点にあるのだが、それが事実を明らかにしたいというようなジャーナリズム的な興味からではないことが独特である。

　中間報告という形で発表された調査内容は、原三溪の1910年代のソウルでの土地開発についての基礎的な調査と、それに応答して三溪園でどのような庭園造園が行われたかというパラレルな状況についての分析だった。

　原三溪が自らの邸宅・庭園を市民に開かれた公園として創造していたこととしても有名だが、さらに言えば三溪園を核とした周辺の住宅地開発も視野に入れていたようである。

　ソウルの土地開発における文化住宅の展開は、三溪園周辺における住宅地開発と連動するものであるし、両者を総合的に捉えてみると、原三溪の活動はE・ハワードの『明日の田園都市』（1898）の日本、韓国における先駆的な習作的実践としても捉えられるかもしれない。

　鎌田の中間報告を聞いてみると、依然としてどこに着地するのかは不明瞭ではあるがすでに十分に知的興奮を覚えるものである。私が期待したいのは、学術的な研究を越えて、アーティストとしての鎌田が、リサーチを通じて原三溪の事業家・芸術家としての空間感覚であり、都市計画家としての感性を再構築した身体性を獲得することである。近いうちに、本調査を踏まえたインスタレーションなり展覧会としてまとめるということなので、まずはその発表に大いに期待したい。

　また、今回の調査をきっかけに原三溪に関わる歴史研究者・アーティスト・建築家などの交流が活発になる機運もあり、それも含めて長期的な運動に展開すると面白いなと思っている。

工藤 春香

Haruka Kudo

WS①　9/18（水）25（水）30（月）@左近山特別支援学校
WS②　10/2（水）7（月）9（水）@左近山特別支援学校
滞在　11/18（月）〜11/24（日）@左近山アトリエ131110
展覧会　1/21（火）〜2/9（日）@左近山アトリエ131110

「わたしたちがいるために」（2025年1月、左近山アトリエ131110）会場風景
Photo：西山功一

「わたしたちがいるために」取材日記
Photo：西山功一

ワークショップの様子（2024年9月、左近山特別支援学校）

活動概要

2021年から障害当事者運動のリサーチを続けてきた工藤春香は、横浜における障害児の「親の会」の活動をリサーチし、その発展と歩みを探りました。「親の会」の関係者や地域コーディネーター、地域訓練会の運営委員会などへの取材を重ねました。また、左近山特別支援学校や地域訓練会に関わる育児中の母親たちが、作品創作を通じて自分の時間を持つワークショップ（WS）を実施。今回の活動を通じて制作した作品で構成された展覧会「わたしたちがいるために」を左近山アトリエ131110で開催しました。

滞在拠点

左近山アトリエ131110

プロフィール

アーティスト。東京都生まれ。社会的な課題へのリサーチを基に、社会の周縁におかれる立場の人々への想像から、テキストやオブジェ、映像を組み合わせたインスタレーションを制作している。コレクティブ「ひととひと」メンバー。主な展示に、障害者政策と当事者運動の100年の歴史を取り扱った「MOTアニュアル2022私の正しさは誰かの悲しみあるいは憎しみ」（東京都現代美術館、2022年）、「ひととひと」企画展「女が5人集まれば皿が割れる」（北千住Buoy、2021年）

ワークショップの様子（2024年9月、左近山特別支援学校）

Q1　どのような活動をしていますか？

過去の事件や社会運動、制度の変遷などのリサーチと、個人の取材を通して、それらがどのように影響を与えながら関わっているのかを、年表や映像、オブジェなどを組み合わせてインスタレーション作品にしています。近年は障害当事者運動やジェンダーについて、社会構造と個人の関係を可視化しようとしています。

今回は、横浜市での障害児の親の会の活動を取材しました。その目的のひとつは、市の障害福祉が行政主導ではなく、当事者の親の運動によってどのように出来上がっていったのかを可視化すること。また、母親が育児の第一責任者とされることで、母親の人間としての多面性などが軽視されているのではないかという思いがあったので、ワークショップを通して母親役割以外の面を表すことも目指しました。

ワークショップ参加者の作品
Photo：西山功一

Q2　この助成をどう活用しましたか？

まず、横浜市の福祉に関わる歴史の調査や、障害児の親の会についてのリサーチから始めました。ACYに神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターを紹介してもらい、主要な団体や関係者の方と繋いでいただいたことで、過去から現在に繋がる活動を取材することができました。いま活動している地域訓練会や、会に所属する親御さん達の話も聞けました。

また、滞在拠点である左近山アトリエの熊谷さんに左近山特別支援学校を紹介してもらい、学校の教室や陶芸窯を使わせてもらうなど、多大なご協力をいただきました。そのおかげで、障害がある子を育児中のお母さん方と、陶芸と対話を通して自分の時間を持つワークショップを行うことができました。

これらの活動から作品を制作し、1月に左近山アトリエで展覧会を開催しました。展示に際して、作品施工や模型制作などサポートしていただき、とても心強かったです。

「わたしたちがいるために」（2025年1月、左近山アトリエ131110）
会場風景　Photo：西山功一

Q3　横浜の滞在・活動で得たものは？

親の会で実際に活動していた方の話や、現在活動している方の話、今育児中の人の話を聞くことで、イメージしていたのよりも深くて複雑な事情を知ることができました。なぜ当事者の親が動かなくてはいけなかったのかなど、当時の社会状況を背景にした運動と政治の関係性についても、横浜に住んでいる人からでないと聞けない話を聞くことができました。

また、拠点の方々が地域と普段から関わっているので、私が知りたいと思う場所や人のところに一緒に行ってくださったり、拠点のカフェに普段から来ている人から今回のテーマにつながる話が聞けたり、この場所とのつながりが作品をつくる上で大きな影響を与えてくれました。熊谷さんが左近山団地と周辺を案内してくれ、5時間一緒に歩いたことも地域のことがみえてよかったです。

展覧会では、カフェの常連の方がみに来てくれたり、現代美術のファン以外の方にもみてもらえる機会があったのは、貴重な経験でした。

「わたしたちがいるために」（2025年1月、左近山アトリエ131110）
会場風景　Photo：西山功一

Q4　今後の展望を教えてください。

今まで観光地的にしか知らなかった横浜ですが、今回の滞在やリサーチを通して、人が住んでいるまちとして興味を持ちました。港町として独自の歴史があるので、その辺ももっと調べたかったなと思っています。今回の滞在制作では、他の学校ともつながれましたし、今後もワークショップや展示をしたいと考えています。

今回のフェローシップ助成を通じて、普段美術と接点がない障害福祉の団体ともつながれました。個人の活動だとなかなか難しいことなので、自身の制作活動として新しいことにチャレンジできたと感じています。今後も、美術と接点があまりないような方々を上手に巻き込みながら活動していきたいです。

Photo：菅原康太

拠点からのコメント

左近山アトリエ131110

大規模団地、左近山団地内ショッピングセンターの店舗を活用したアート拠点。ギャラリー・ワークショップ・カフェなど、屋外の広場とも連携し様々な活動を展開している。

Q1　今回期待したことを教えてください。

私たちは団地再生を目的としてここを運営しているので、左近山団地を知らない人や来たことがない人たちに知ってもらうことは重要なことです。アーティストが滞在することで、住んでいる人たちやスタッフの刺激にもなるし、遠方からも人が来てくださるので、左近山団地の魅力が多くの人に伝わる機会になっています。

昨年度のアーティストの活動をみていた団地の方々からもう一回やった方がいいよ、という声もあがっていました。団地ができた当初から入居している方の中には、新しいもの好きの人が多いので、そういう人にも楽しんでもらえたらと思っています。住民の方も、遠方の方も面白がってくれることで、左近山団地が活性化することに期待しています。

展覧会中の様子

Q2　アーティスト滞在で得られたものは？

今までも、展示やアートイベントを開催してきましたが、工藤さんのような現代美術のアーティストがいらっしゃるのは初めてだったので、どんな活動になるのか想像もできなくて楽しかったです。

工藤さんが来てくれたことで、近いけどご縁がなかった左近山特別支援学校ともつながりができました。私たちはアートを通じて団地再生をしているので、このようなつながりは今後も大事にしていきたいと思っています。

展覧会のときには空間づくりの相談もしてくれて、ランドスケープデザインを担う弊社のスタッフも一緒にサポートしました。今回の展覧会は、私たちにとっても空間の使い方を広げる良い機会になりました。

展覧会開催前に工藤さんと左近山団地を紹介しながら5時間ほど一緒にあるきました。そのことをきっかけに、左近山の地形模型をベースとした作品を制作してくれたことも嬉しかったです。アーティストの視点で、また違う左近山をみることができました。

話し手：熊谷恵美子、森智佳子
（左近山アトリエ131110／STGK Inc.）

レビュー

長谷川 新

工藤さんがやったことは、大掴みに列挙するだけでも、レジデンス、インタビュー、資料渉猟、ワークショップ（陶芸）、展覧会、記録冊子となる。やりすぎだと思われるかもしれないし実際かなりの重労働であったことは間違いないのだが、ここまでやらなければ達成できないと作家はあらかじめ察知していたことに注意を向けたい。ここまでやらなければならず、これだけ多様でなければならない理由がある。

横浜市は独自の障害福祉制度を有する。これは障害児の親の会の粘り強い活動によって少しずつ形成されていったものだ。まずこの軌跡と結果を学び、可視化したい。しかし、それだけではたりないし、むしろまずくさえあると作家は考えた。運動や制度を強調するほどに、個々の家族の具体的な生活が一括りにされる。さらに進んで、「母親役」を担う親の負担が見えづらくなる。「母親」であることから降りた、なんの役割も負わない、自分であることに集中できる時間を、一時的にでもつくることができないだろうか。したがって工藤さんのプロジェクトは、最初から「運動の調査」と「親であることの解除」という「両輪」でなければならなかった。

拠点となった「左近山アトリエ 131110」は穏やかで居心地の良い空間である。熊谷さんをはじめとする団地住民が作家と当事者をつなぎあわせ、負担の共有と軽減がはかられていた。だが、展覧会は前述の「両輪」を共有するために、必要なだけの息苦しさも湛えていたことも指摘しておきたい。たんに「かわいい」や「大変だ」で終わらせないような緊張感がそこにはあった。

ワークショップの結果として披露された粘土を削って制作された陶芸たちは、自分の体や心をかきむしるのではなく、粘土を触り、剥がし、構成するという、いわば「自分の外部」をつくっていくような実践に思われた。自分は参加できなかったが、粘土を削るちょっとした快感、そこで交わされた他愛もない会話、焼けるまでの間の、待つには少し長く感じる日々を想像することができた。

冊子は労作であり（展覧会を訪れると、工藤さんに「これ読んでください！」と前のめりに冊子を渡されたのを覚えている）、インタビューやワークショップの記録、工藤さんの思考が、たくさん伝えたいがゆえの小さいフォントサイズでぎゅっと定着している。これでもだいぶ削ったんだ、と言われなくてもそうわかるほどだ。

「適切な距離をとる」という言葉が時折言い訳のように聞こえることがある。『＜延命＞の倫理――医療と看護における』の著者である柏﨑郁子が「程よい接近」という言い方をしていたが、いずれにせよ難しい。口ではなんとでも言えるからだ。展覧会には左近山の標高差がわかる立体地図が展示されていて、これは人間とも制度とも異なる第三項として挿入したとも言えるが、展示全体が、起伏の記録と言えないだろうか。左近山団地の起伏、制度の起伏、家族の起伏、その人の起伏、そして工藤さんの起伏。それぞれへの、程よい接近。工藤さんは熊谷さんと5時間歩いたという。

敷地 理

Osamu Shikichi

滞在①　8/14（水）〜20（火）
@Dance Base Yokohama / 急な坂スタジオ
滞在②　8/21（水）〜8/27（火）@MPPT
プレゼンテーション　8/25（日）@MPPT

「a butterfly swimming under the water」プレゼンテーションの様子
（2024年8月、MPPT）

リサーチの様子（2024年8月、MPPT）

「a butterfly swimming under the water」
トークの様子（2024年8月、MPPT）

活動概要

敷地理は、新作に向けたリサーチを京都と横浜で進めました。京都では能や日本舞踊のトレーニングプログラムに参加し、横浜では毎日複数のゲストを迎えながらリサーチを展開。能にみられる「生きている体で表現される亡霊」や「遅延した声と身振り」に着目し、特に『井筒』に表れる多重化したジェンダーの表象に関心を寄せました。プレゼンテーションでは、リサーチの成果を共有しつつ、能や日本舞踊の要素とLap Danceを組み合わせた新作の手がかりを探り、来場者との意見交換を重ねました。

滞在拠点

Murasaki Penguin Project Totsuka

プロフィール

振付家、ダンサー。ベルギーと日本を拠点に活動。外側から自分をみることができない中、自分に最も近い物質で構成された他者の身体をみることを通じて、どの様により強い現実感を捉えられるかに興味を持つ。その過程において、まなざしの政治性、暴力性に注目しながら人間の身体に対するあらゆる識別方法を曖昧にし、一時的に作り変えることに関心を抱いている。

リサーチの様子（2024年8月、MPPT）

Q1　どのような活動をしていますか？

ベルギーと日本の二拠点で、ダンスとパフォーマンスをつくっています。人間の身体への新しい眼差しを探すことをテーマに制作しています。

今回ACYには新作のソロ作品をつくるためのサポートをしていただきました。海外で活動していると、自分がアジア人という大きなカテゴリーでみられていることに気付き、祖先的な身体への興味が強くなってきました。今回は能の『井筒』をベースとする作品のためのリサーチを行いました。

能はかつて男性のみで上演されるという側面がありましたが、『井筒』では、女性の幽霊が、亡くなった夫の服を身に纏って夫になりきり、井戸の水面に反射した夫にみえる自分と一緒に踊るという表現があるのですが、その重複したジェンダーのイメージに着目しました。その表現を現代的に解釈し、劇場の対局にあるような人が1対1で行うLap Danceとの掛け合わせを試みました。奇妙に性的な緊張感がある状態、それがダンスの中でどう生まれていくか、そのような実験をしていました。

「a butterfly swimming under the water」
プレゼンテーションの様子（2024年8月、MPPT）

Q2　この助成をどう活用しましたか？

まずは京都のトラディショナル・シアター・トレーニングというプログラムに参加し、能について学び、稽古をしました。横浜でははじめ、急な坂スタジオとDance Base Yokohamaに滞在し、後半の1週間Murasaki Penguin Project Totsukaで活動しました。毎日2名のゲストに来てもらい、稽古で習ったものを下敷きに、身体を使ってリサーチを行いました。

8月25日にはMPPTで、これまで得たもの、実験してきたものをプレゼンテーション形式で共有しました。この助成を受けての活動は、様々な専門家からリサーチ内容に対してフィードバックを得られる貴重な時間になりました。横浜での滞在を終えてからも、ロンドンのレジデンスで同じテーマでの制作活動を続けています。

リサーチの様子（2024年8月、MPPT）

Q3　横浜の滞在・活動で得たものは？

横浜のスタジオを借りることができたことで、そこの人たちとつながりを持つことができました。MPPTのお二人にはプレゼンテーションに向けて、ディスカッションやテクニカルな面でもサポートしていただきました。

また、横浜はアクセスが良いので、日本各地で活動する人たちに戸塚に来てもらい、交流することが出来ました。自分にはなかった視点の、独特なアドバイスをもらえたことは、新作にむけて貴重な機会になりました。

時々、サイクリングをして、海をみたり、リフレッシュできた側面もあります。アートのイメージが強い横浜を、いろんな角度でみることができたのも良い経験でした。

「a butterfly swimming under the water」
プレゼンテーションの様子（2024年8月、MPPT）

Q4　今後の展望を教えてください。

横浜は特にパフォーミングアーツに力を入れて、国際的に開いている印象を持っています。今回リサーチを行った作品は、最終的には横浜で発表したいですし、ヨコハマダンスコレクションやYPAMにも参加したいと思っています。今回できたご縁も含めて、横浜との関係は続けていきたいです。

30代になり、どこを拠点にするかとか、制作と生活をどう結びつけるかなど、創作活動についての考え方が変わってきています。日本でスペースを持ちたいとも考えています。10年くらいの長いスパンで、これからは活動を考えていきたいです。誰とどこにつくって、地域への開き方などなども考えなければいけないので、そういう意味でも、MPPTの活動がみれたのは参考になりました。

Photo：堀越圭晋（エスエス）

拠点からのコメント

Murasaki Penguin Project Totsuka

2022年9月にオープンしたパフォーミングアーツとマルチメディアアートの新しい拠点。ダンスや演劇、音楽、映画など、さまざまな形態の作品発表が可能。

Q1　今回期待したことを教えてください。

昨年度から他の拠点や滞在したアーティストとのつながりを持つことができ、互いの上演をみに行くなど、ご縁が沢山ありました。滞在したアーティストが拠点の新しい側面に出会わせてくれたり、地域の人と一緒に作品をつくる事も魅力的です。私たちは地域との協働に課題を感じていましたので、ACYやアーティストが媒介者となってくれることがありがたいと感じています。

このフェローシップ助成は、滞在拠点を横浜の郊外に設定しながら、地域との協働とキャリアアップ支援を同時に行っている所がユニークだと思います。これからも、アーティスト、拠点、地域の新しい出会いにつながっていくことを期待しています。

Q2　アーティスト滞在で得られたものは？

敷地さんは毎日日替わりでゲストを招待し、美術家、イラストレーター、俳優、振付家、キュレーターたちと創作方法や批評を交換する、面白い取り組みだと思いました。また、様々な方にMPPTを知っていただく機会になりました。

そして、ゲストと行っているウォームアップに一緒に参加しませんか？とお声がけいただき、私たちも参加しました。そのワークは「同意」について。身体的な接触が創作プロセスの一部である今回の敷地さんの作品にとってそれは重要な要素でした。プライバシーの必要性を理解しながら、能とLap Danceのクロスオーバーは、深い歴史に触れながら実験的で親密な体験でした。

私たちは、振付や照明、小道具のフィードバックを求められた際に応じドラマトゥルクのようなサポーターとして創作に関わりました。最終的に敷地さんたちは、観客にプロセスを示す美しいパフォーマンスを作り上げてくれました。私たちは関わることができて光栄に思いました。

話し手：黒田杏菜、David Kirkpatrick
（Murasaki Penguin）

滞在中の様子
Photo：黒田杏菜

2024							2025	
6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
ヒアリング	京都調査	拠点滞在 / プレゼンテーション						
横浜能楽堂専門職員を紹介 滞在サポート		プレゼンテーション運営サポート 審査員来訪				トーキョーアーツアンドスペース本郷での展覧会について広報協力		

レビュー

野上 絹代

敷地が本助成に採択された理由として、私の記憶している限り、海外での経験値と経歴に裏打ちされた行動力、そしてプロジェクトの目指すところである〈Lap Dance×能〉という視点のユニークさだったと思う。私自身も敷地の活動に関心を持ち、2024年8月25日、戸塚にある Murasaki Penguin Project Totsukaにて敷地のワークインプログレス（以下、WIP）に足を運んだ。

WIPでは最初に敷地のベルギー・海外での活動や独自のダンスメソッドの説明・実演が行われた。WET（wired奇妙／erotic性的／tension緊張感）を意識しているという話から「舌は第3の手である」として、それを多用したウォーミングアップの実演はそれをかなり体現していると感じた。

また、「自分の身体を疑ってみる」とし、顔や身体の一部を隠し（あるいは意識的に使わずに）踊るということも披露された。個人的に「表現＝見せる」という前提を持っていたが、ここでは「隠す」ことを「見せる」という、矛盾した、あるいは引き合った状態が生まれ、それ自体が敷地の観客という存在に対する＜問い＞のように感じて興味深かった。

そして、ACYアーティスト・フェローシップ助成を利用して取り組んだ活動への言及に移り、京都で能『羽衣』を経験したこと、その試演が行われた。しかし最終的にはLap Danceと能『井筒』の融合を目指しているという。『井筒』に出てくる、死んだ夫の着物を着て井戸の淵で踊る妻という設定に「死人を踊る生者（亡霊）」と「夫の着物を纏う妻、それを演じる能役者（男性）」という様々なねじれを見出したという話が印象的だった。

さらに、日舞『黒髪』を用いたLap Danceの試作が披露された。こちらは従来のLap Dance 同様、観客1名のみに見せるプライベートダンスをその他の観客が見守る中での実演であった。Lap Danceを「プライベートで官能的なダンス」と認識していた私は、内心緊張しながら見ていたが、だんだんと、踊る人物よりも、1名の観客のその状態に注目している状況に妙な可笑しみを感じていた。

観客として、演劇は「状況」から、ダンスは「状態」を糸口にしてその表現の深いところを探っていくという認識だったが、この大勢の観客の中でプライベートダンスが行われているという空間全体の「状況」と、ダンサーを前にした唯一の観客の「状態」が全く同価値で板の上に存在していた。その時点で、唯一の観客はもはや観客ではなかった。じゃあ私は？観客か？

私自身の中で、その混乱が面白かったのかもしれない。

劇場ではなく1対1の表現に興味がある、とも言っていた敷地。本人にとって「観客」とは何なのか、ということを今度聞いてみたい。

永田 康祐

Kosuke Nagata

滞在　9/25（水）〜10/1（火）@Co-coya
展示　1/31（金）〜3/23（日）@東京都写真美術館
WS　2/24（月・休）@Co-coya

ワークショップの様子（2025年2月、Co-coya）
Photo：工藤葵

《Fire in Water》（2025年1月、東京都写真美術館）

上映&フードイベントの様子
（2024年10月、Co-coya）
Photo：工藤葵

活動概要

「食」を視点に、映像作品やコース料理形式の作品を制作する永田康祐は、中山に滞在し、農場や養鶏場、ブリュワリーなど、食や発酵に関わる生産者や実践者をリサーチしました。滞在最終日には、言語や食文化を翻訳的視点から考察する《Translation Zone》（2019）の上映に加え、中山で出会った食材で、「翻訳」をテーマにした料理を考案し、制作しました。中山での滞在や交流を通して、「都市／農村部」という二項対立の曖昧さについて考察する機会となり、新作につながる視点を得ました。

滞在拠点

Co-coya

プロフィール

1990年愛知県生まれ、神奈川県を拠点に活動。自己と他者、自然と文化、身体と環境といった近代的な思考を支える二項対立、またそこに潜む曖昧さに関心をもち、写真や映像、インスタレーションなどを制作している。近年は、食文化におけるナショナル・アイデンティティの形成や、食事作法における身体技法や権力関係、食料生産における動植物の生の管理といった問題についてビデオエッセイやコース料理形式のパフォーマンスを発表している。

上映&フードイベントの様子（2024年10月、Co-coya）
Photo：工藤葵

Q1　どのような活動をしていますか？

「食」をテーマに、映像やインスタレーション作品を制作しています。最近はポップアップレストラン形式で、実際に料理をつくってフルコースを提供し、「食べること」を通じた作品を制作しています。料理は、写真や映像と同じように、身近なものであり、対話的に関係が構築ができるメディアだと考えています。

今回のフェローシップ助成での活動は、一昨年から継続している韓国の稲作と酒造における日本統治の影響をテーマにした作品につながるリサーチをすることが主な目的でした。

また、横浜は都市と農地が入り混じるまちなので、普段は一方向の消費になってしまう都市生活の中での、物質の循環なども考えたいとも思っていて、漠然と「発酵」や「自然農法」について興味を持っていました。

上映&フードイベントの様子（2024年10月、Co-coya）
Photo：工藤葵

Q2　この助成をどう活用しましたか？

個人で制作する作品には規模の限界があるため、この助成を活用して作品のスケールを大きくしたいという目的がありました。結果、チームを組んで制作をすることができ、今後の展開を考える機会となりました。

滞在拠点のCo-coyaには、醤油搾り師がいると聞いていたので、発酵にもっと注目しようと考えていましたが、中山にはパティシエや料理研究科、有機農家の方など、幅広く食に関わる人がいました。醤油や発酵のこともそうですが、地元の養鶏場の卵でお菓子をつくるとか、共用の果樹の果物で料理をつくるとか、生産や製造について包括的にお話を伺うことができたことは、次作のアイディアの種につながったと思います。

滞在最終日には、映像作品《Translation Zone》の上映とあわせて、滞在中に出会った食材を料理にした、スケッチみたいな状態の作品をみなさんに振舞いました。滞在中に、作品として考えていたことと、中山で感じたり、考えたことの交差する場所を探るために、2月に韓国の醸造に関わるワークショップをCo-coyaで開催しました。

ワークショップの様子（2025年2月、Co-coya）
Photo：工藤葵

Q3　横浜の滞在・活動で得たものは？

滞在しながらの調査はこれまでも各地でしてきましたが、文献だけではなくインタビューを通したリサーチは今年度から取り組んでいて、多くの人に話を聞くことができました。文献だけではなく、日常の生活や商業的な活動の中で、なにが起きているのかを知るきっかけになり、大きな影響を受けました。

中山には、アートに関わる方もいますが、「食」や「農」「発酵」に関わる人など、他のアーティスト・イン・レジデンスでは会ったことがない人と出会うことができました。生産者など、私とは全然違う視点で活動する方のパースペクティブが知れて良かったと思います。

滞在の最後も、料理をつくってみんなで食べましたが、自分の作品をつくるということと、実際にその地で生産するというのが入り混じった会になったことが面白かったです。これまで翻訳をテーマにした作品をつくってきましたが、料理の物質AからBに変わることも翻訳と捉えて、その物質の循環を表現した料理・作品をつくりました。

ワークショップの様子（2025年2月、Co-coya）
Photo：工藤葵

Q4　今後の展望を教えてください。

横浜の移民にまつわる料理の調査をしていて、例えばベトナム人街や台湾人街など、様々なバックグラウンドに向き合い制作したいと考えています。

また、今回中山やその周辺の方々とつながりが持てたので、継続的に関係をもちながら、作品にしていけたらいいと思っています。2017年から横浜に住んでおり、住民としても横浜との関わりは続くと思います。

今年は一時的に台湾に拠点を移しているので、作品制作のために台湾の食文化について調査をする予定です。原住民族や、統治時代の砂糖製造を調査して、今回韓国を題材にリサーチしたことをより広い視点で考えていきたいと思っています。

Photo：大野隆介

拠点からのコメント

Co-coya

空き家をリノベーションした職住一体型の地域ステーション。土壁や漆喰、草屋根など自然を感じさせる改装手法が活かされ、多種多様な活動が繰り広げられている。

Q1　今回期待したことを教えてください。

昨年度と今年度、違うアーティストが滞在するので、その違いを楽しみにしていました。昨年は、地域の人たちとつながりが多く生まれた滞在で、今年はCo-coyaを中心に濃密な関係が生まれた滞在だったという印象です。新たな視点や、刺激を受けられることを毎回楽しみにしていますし、中山に滞在したことがきっかけで生まれたものがあったら嬉しいです。

滞在したアーティストのその後の活動もフォローしますし、地域の人たちで活躍を見守っている感じがあり、いつでも中山に帰ってきて欲しいと思います。これからは滞在してくれたアーティストをみんな呼んで、同窓会的なこともしたいと思っています。

滞在中の様子

Q2　アーティスト滞在で得られたものは？

滞在中の永田さんは、家に帰ったらご飯を作って、その日あったことを話してくれたり、ホームステイに来ているみたいでした。作品は学術的だし、気難しい人かと想像していましたが、ホストマザーと短期留学生という感じで面白かったです。

はじめはどのようなサポートをすべきか悩んでいましたが、とにかく「食」に関わる人をたくさんつなげようと考えました。発酵というテーマを持っていたので、醤油搾りのグループに連れていったり、そういう関係性づくりが広がっていったのが良かったと思います。滞在後半は近所の方と一緒に出かけたり、みんなで永田さんを囲む感じになりました。

面白い人がまちに来ると人に言いたくなるし、こういう出会いで変化が起こります。「進む」なのか「深まる」なのかはわからないけど、そういう変化のきっかけになるのが大事な価値かなと思います。

話し手：関口春江、大谷浩之介
（Co-coya／
753プロジェクトメンバー）

レビュー

天野 太郎

永田の本プロジェクトのテーマは、20世紀東アジアにおける移民史、特に食文化の移動と混淆にかんするリサーチの実施である。具体的なリサーチは、横浜市内での中国・台湾や韓国系の食文化の実践についてリサーチ、日本における中国・台湾や韓国系食文化の移入について文献調査。並行して横浜市中区を中心に料理店などへの聞き取りを行い、世代間での文化の違いや、日本の食材や税制が及ぼした影響について調査するものである。

また、韓国の稲作や酒造文化についての取材・撮影を行い、日韓の酒税の違いによってもたらされる文化的な差異や植物や微生物の育種に対する考え方の違いについて、取材や撮影を行う。これに伴い、横浜市の韓国料理店を訪問したり、韓国の醸造所や農場を訪問。

また、台湾にて日本占領期における食文化の混淆や台湾少数民族の食文化のリサーチを行い、日本占領期に導入された農業技術や品種について文献・フィールド調査。また、台湾東部の少数民族の食文化についてフィールド調査を行う。

こうした調査の歴史的文脈は、大雑把に言えば20世紀から今世紀となるが、日本の統治時代が射程に入ることもあるので、韓国の日韓併合時代（1910-1945）に加え、台湾は、1895年から1945年という日本の植民地統治では最長の統治も念頭に入れることになる。実際のリサーチの対象の時代設定は、一つの目標として重要である一方、それまでの歴史的な視座も考慮に入れる必要があると思われるが、これについても、Zoomの面談でアーティストからもその必要性が示されたのは本プロジェクトの重層的な歴史的視点が示されており興味深かった。今日、当たり前のように食している食材が、例えば、恐らく日本から韓国に持ち込まれた唐辛子など、意外な歴史的背景を持っている点をどういった流れとして位置付けるのかが、本プロジェクトにおける重要な点と思われる。

食は、それぞれの国、地域におけるローカルなテーマではあるが、同時に郷土愛、場合によっては、ナショナリズムに繋がる一方、世界がグローバル化することでもたらされる食材の移入、移出も意識される。永田のこれまでの、丹念なリサーチに基づく作品制作をみてきても、本プロジェクトが大いに期待出来る提案として理解した。

また2月に滞在拠点であるCo-coyaで行われたマッコリの熟成の仕込みのワークショップを実施、横浜市内外から8名が参加した。韓国の小麦麹と日本の米麹の二種類を使い、その歴史的な背景をわかりやすく説明しながら実施され、参加者への丁寧な対応が印象的だった。

野村 眞人

Masato Nomura

調査　8/1（木）〜8/11（日）@弘明寺、長津田
滞在　10/18（金）〜11/4（月・休）
　　@アートスタジオ アイムヒア
発表　11/2（土）〜11/4（月・休）
　　@アートスタジオ アイムヒア

《吉日再会》（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）
Photo：レトロニム

「分身と観客」展示の様子（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）

《わからないのがいいでしょう》
（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）
Photo：レトロニム

活動概要

野村眞人は、「分身」と「観客」というキーワードをもとに近年の作品や活動を編集し、演劇作品を上演と展示として発表しました。精神科訪問看護師と俳優の親子による《吉日再会》の上演や、自身の墓参りをきっかけに制作した《そうか、おまえいまそこにいるのか》、高齢者福祉施設の利用者と制作した作品《わからないのがいいでしょう》等を展示。また、弘明寺の人々から観客席となる椅子を借りるプロジェクトを展開し、まちと関わりながら創作活動を展開しました。

滞在拠点

アートスタジオ アイムヒア

Photo：shimizu kana

プロフィール

演出家。レトロニムのメンバー。京都を拠点に演劇に取り組んでいる。人・場所・環境の現実的な関係に演劇を引用し、アクチュアルなフィクションに再構築する。近年は、青森県津軽地方での墓にまつわるフィールドワークや、精神医療従事者や高齢者福祉施設での聞き取り等をベースとした作品・プロジェクトに取り組んでいる。また、俳優として村川拓也作品、庭劇団ペニノなどにも参加。利賀演劇人コンクール2018優秀演出家賞受賞。「部屋と演劇」のメンバーでもある。

滞在時の様子

Q1　どのような活動をしていますか？

京都を拠点に、舞台芸術を中心に演出家として活動をしています。半分ドキュメンタリー、半分フィクションというような作品をつくることが多いです。上演作品だけではなく、展示形式で作品も発表していますが、どちらも演出家として制作をしています。

今回は「分身」と「観客」というテーマをもって活動をしました。舞台作品以外でも作品を発表し始めた時期で、上演と展示がなぜわかれるのか、わかれてきたのか、わかれた結果どうなったのか、ということを考えていました。演劇の公演と展示をパッケージにして発表するということが今回のひとつのチャレンジでした。

また、私の祖父母は青森から横浜に出稼ぎに来て、そのまま横浜に住み着いたのですが、なぜ青森に帰らなかったのかなど、その背景を聞けないまま亡くなってしまいました。これまでも、誰かの故郷を出発点にした作品をつくってきたのですが、自分のルーツにもつながる横浜に長く住んでいる人の話を聞いて、作品をつくってみたいとも思っていました。

《観客席を貸してくれませんか？》
（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）　Photo：レトロニム

Q2　この助成をどう活用しましたか？

最初に滞在したのが8月上旬。滞在拠点となる弘明寺の散策に加えて、幼少期に何度か訪れた祖父母のプレハブ小屋があった別のまちにも行ってみました。しかし、当時の思い出の場所は無くなっていて、祖父母とのつながりも感じられず、知らないまちになってしまったようでした。祖父母とのつながりから作品をつくろうとも考えていましたが、なにもないことで気持ちを切り替えられて、次の創作に向かうことができました。

次に滞在した際には、過去作の上演と展示を行いました。《吉日再会》という作品の上演後に、同じ会場で展示作品をみせるという初めての試みでしたが、渡辺さんに相談に乗ってもらい、さまざまなサポートをしてもらえて、なんとか開催することができました。その際、問題になったのは、観客席をどうするか、ということです。渡辺さんやACYと相談しているうちに、まちの人から椅子を借りるというアイデアが生まれ、商店街のお店を中心に相談にまわりました。思い入れのある椅子や、商売柄がみえる椅子など、まちの椅子が集まり、表情豊かな観客席ができあがったことは良い経験になりました。

《吉日再会》（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）
Photo：レトロニム

Q3　横浜の滞在・活動で得たものは？

初めて上演と展示というスタイルを実施できたことで、自分にとっての基準ができました。今回の活動を通じて「分身」と「観客」というのも、重要なテーマであるということを再認識できました。一方で、新たなテーマもみえてきました。8月に祖父母のプレハブ小屋があったまちにいったことがきっかけです。祖父母は線路の拡幅工事に携わるために出稼ぎに来ていたのですが、線路は青森まで続いているのになぜ帰らなかったのだろうと疑問に思い、「故郷」と「観光」というキーワードが浮かびました。まだぼんやりとしていますが、これから取り組んでいきたいテーマになりそうです。

今回の滞在で、初日に渡辺さんがさまざまな人や場所を紹介してくれて、弘明寺を面白いと思える動線をひいてくれたことが大きな影響を与えてくれました。椅子を借りるときに、まちの人からもいろんな話を聞いたり、ちゃんとしたコミュニケーションが出来たことで、椅子をお借りすることが出来たし、作品に興味を持ってくれた方も多くいました。地域とつながる手法としても面白かったし、今後もいろいろなまちでやりたいと思っています。

《吉日再会》（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）
Photo：レトロニム

Q4　今後の展望を教えてください。

ひとつは「故郷」と「観光」という新しいテーマで作品をつくることです。祖父母とのつながりがある横浜が出発点となってうまれたキーワードですし、祖父母が遠くから横浜に住み続けることになった個人的な関心は、もう少し掘りたいと思っています。また、まちから椅子を借りるプロジェクトもそうですが、誰かと協働して作品をつくるということもやりたいと思っています。

今後は展示形式での作品発表もさらに推し進めたいと思っています。演出家として上演作品も展示作品も、作品のねらいや背景が他者にも伝わるようにしていきたいです。

1年ほどベルリンを拠点にしていますが、2026年には日本で新作の演劇作品を上演する予定です。そのテーマは、今回の滞在から生まれてきた「故郷」と「観光」にしようと考えています。

Photo：渡辺篤

拠点からのコメント

アートスタジオ アイムヒア

アイムヒア プロジェクトと株式会社泰有社の共同運営によるオルタナティヴスペース。さまざまな展覧会／イベント／レジデンスプログラム等を実施している。

Q1　今回期待したことを教えてください。

現状の形に加えて希望があるとしたら、このプログラムを通じたコミュニティ的な機能がもっとあるといいなと思います。例えば、昨年度、別の拠点に滞在した坂本夏海さんが、今年度うちのスペースでも展示に利用し、企画に私も参加しました。活動テーマに共通項のあるアーティストも多いと思うので、助成をきっかけとした交流が今以上にあるといいと思います。

私自身もアーティストとして課題意識の共有をしたいですし、必要に応じて展示方法のノウハウや、プロジェクト運営の話などもできるかと思います。採択年以外にもアーティスト・フェローの方々にうちのスペースを活用して欲しいですね。拠点同士のつながりも今以上にあるといいです。

Q2　アーティスト滞在で得られたものは？

野村さんは人に対して物腰がやわらかく、とても丁寧で、その姿勢に刺激を受けました。椅子を借りてくるプロジェクトを通して、商店街とアイムヒアを結びつけてもくれました。そうしたことも、アートの良さの一つだと思います。新しいアーティストが来ることで、私自身にも、まちにも変化が生まれます。

滞在中、野村さんの福祉の仕事についても話を聞きました。私も福祉に関わるテーマを扱う身として、それがどう制作に結びついているかなど興味深かったです。野村さんは他者の尊重や向き合う姿勢を大事にされていて、関係性自体によって作品が生まれていました。

通常、演劇は舞台で行うことが多いですが、演劇をやるためにまちに出ていくという野村さんの姿勢は、まちに新しい風が吹き込んだように感じました。

話し手：渡辺 篤
（アートスタジオ アイムヒア／現代美術家）

滞在中の様子

レビュー

岡本 純子

2024年11月の上演と展示に先立ち、10月からのアートスタジオアイムヒアでの滞在について野村さんにお話を伺った。アイムヒアのある弘明寺駅で降りると、庶民的な街並みが広がり、アーケード商店街が健在で、昔からありそうな惣菜屋等に交じって、ケバブやカレーの店もあるところに町の活力が感じられた。野村さんは1つ隣の上大岡のウィークリーマンションから徒歩で通い、町の雰囲気も気に入っていたそうだ。

これまでにも複数のアーティスト・イン・レジデンス経験を持つが、アイムヒアは利用時間に制限がなく、運営者の渡辺さんが常駐していて、必要に応じてアドバイスやサポートをしてくれるので、とても活動しやすかったそうだ。

当初は祖父母が青森から横浜に出稼ぎに来て以来、故郷に戻れなかった事情への関心から、同様の人への聞き取りを計画していたが、事情によりプランに変更が生じた。商店街等から今回の上演の観客席用の椅子、約25個を貸してもらい、その交渉を通じて、各店の人々と交流することになり、椅子は上演後には展示することになった。

野村さんは2年前から拠点の京都の福祉施設で世話人をしており、演劇とのかみ合わせの良さを感じながら、その理由はわからないでいた。横浜での滞在活動に先立ち、埼玉県の高齢者福祉施設でのアーティスト・イン・レジデンスの機会があり、両者をつないで考える機会を得たことで、福祉施設では利用者1人1人に向き合うが、演劇ではそうではなかったことに気づいた。それ以前から、「たったひとりの観客」「ひとりのための観客席」といった構想を持っていたが、観客1人1人と向き合うことに、より実感を持てたのではないか。

今回の上演では、観客は地域の店や組織から貸し出された椅子に座り、終演後の展示で改めて椅子をみることにより、椅子の背景にも思いを巡らせることができるのではないだろうかと想像した。

上演会場の入り口で、観客席を借りた店舗や組織等の記載された地図が配布され、開演前に野村さんからも説明があった。上演は2024年5月に大阪で初演された《吉日再会》で、大阪で長年に渡り精神科訪問看護師として働いてきた男性と、俳優でありその息子でもある親子2名によって演じられた。利用者の私宅を訪問し、対話を通したケアを仕事とする訪問看護師は、俳優を相手にその仕事を再現してみせ、息子は父親を相手に俳優という仕事を演じてみせる。訪問看護師が利用者に丁寧に接する様子から、野村さんの「1人と向き合う」というテーマも感じられるものだった。

終演後の展示では、野村さんの母親の故郷である青森県の津軽地方の村へ、叔父の代わりにお墓参りにいったことをきっかけに制作した《そうか、おまえいまそこにいるのか》のテキストが壁に貼られ、埼玉県にある高齢者福祉施設で出会ったひとりの利用者さんに、かつて暮らした思い出深い街を電話を通じて声で案内してもらう映像作品《わからないのがいいでしょう》を視聴でき、上演で観客席として使われた椅子が一角に展示された。

上演と展示を通じ、様々な1人との向き合い方を体験することで、自身の他者との向き合い方にも思いが及んだ。

公募概要

助成趣旨(抜粋)

本プログラムは、アーティストの創作、発表によるキャリア形成を支援するものです。資金使途は年間個人活動に応じて自由に提案できますが、活動の一環として横浜各地での短期滞在が必要となります。このプログラムを通じて、アーティストは、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場所の獲得し、自身のキャリアアップを目指します。また、ACYは横浜各地において人を惹きつける新たな価値創造を目指し、地域の文化の多層化と複合化に取り組みます。日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動にはげむアーティストを対象とします。

対象

趣旨にある活動を行い、かつ、以下の条件をすべて満たすアーティスト個人
・美術、舞台芸術の分野において活動するアーティスト
・過去のACYによる助成プログラムにおいて、申請者として採択されたことがないこと

提案内容

下記すべてを含むキャリアアップにつながるリサーチや滞在制作、作品発表など、対象期間における創作活動。
・対象となる期間を通じた創作活動
・ACYが指定する横浜市内の拠点での滞在（最短6泊7日）
・地域住民と交流する活動（公演、展覧会、試演会、ワークショップ、トークイベントなど）

対象となる期間

2024年6月1日から2025年2月末日まで

助成額

1,000,000円（定額）

滞在拠点

・アートスタジオ アイムヒア（横浜市南区弘明寺町259　GM2ビル2階）
・ARUNŌ -Yokohama Shinohara-（横浜市港北区篠原町1410）
・Co-coya（横浜市緑区中山5-9-1）
・左近山アトリエ131110（横浜市旭区左近山16-1　左近山団地1-31-110）
・Murasaki Penguin Project Totsuka（横浜市戸塚区戸塚町4247-21地下1階）

サポート内容

・相談、情報提供
・ACYの持つ人的ネットワークの活用
・滞在拠点における活動の支援
・ACY HP等、財団が持つ広報ツールを活用した広報協力
・滞在の様子や展示・公演風景、レビュー等を掲載した記録冊子の作成・謹呈

スケジュール

2024年
3月7日　募集開始
3月13日　オンライン説明会
3月27日　オンライン説明会
4月9日　募集締め切り
5月18日　助成審査会開催
5月23日　審査結果通知

2025年
2月15日　活動報告会（ACY感謝祭内）

SUMMARY

2024年度振り返り

「2024年度 ACYアーティスト・フェローシップ助成」では、昨年度に引き続き、採択されたアーティストが横浜市内に滞在し創作活動を展開しました。本プログラムは、アーティストのキャリアアップを支援するとともに、横浜市内全域で創造的な活動や交流を広げるというACYの目標を実現するための取組みです。アーティストが地域に入り込み、その土地の文化や人々と関わることで、新たな価値や視点が生まれることを期待しています。

アーティストたちは、それぞれの関心を軸に、地域の環境を活かしたリサーチや創作を進めました。地域の人々や資源、文化に触れることで、作品の構想を深めるだけでなく、創作の幅を広げる機会にもなりました。特に、地域住民や専門人材と積極的に交流しながら創作を進める姿勢は、横浜の文化や資源を新たな視点で捉え直すきっかけをもたらしました。

また、今年度の活動を通じて、アーティストだからこそ、地域住民や異なる領域の関係者と自然なかたちで、密な関係を築くことができるということを再認識することができました。自身の創作意欲を原動力に、土地や専門分野を越境して活動するアーティストの存在は、芸術と社会が交わる新たな価値を生み出す可能性を感じさせるものでした。

アーティストたちはACYと拠点の支援を受けながら、横浜の文化資源を活用し、この都市の魅力を実感したように思います。実際に、滞在を終えた後も「今後も横浜で創作や作品発表を続けたい」と語る声が多く聞かれたことは、本プログラムの意義を示すものといえます。

また、アーティストを受け入れた拠点は、単なる滞在の場ではなく、地域との接点を生むハブとして重要な役割を果たしています。活動の支援にとどまらず、「地理的コミュニティ」や「興味・関心のコミュニティ」とアーティストをつなぐコーディネーターとしての役割も果たし、その存在はアーティスト達にとって心強い伴走者となっています。こうした拠点が各地に存在することが、横浜の文化的価値を高め、創造環境のさらなる発展につながっていると感じています。

アーティストが横浜に滞在し、地域住民との関わりを深めながら創作活動を行うことが、地域の文化の多層化や都市の持続可能な発展に寄与するものであると改めて実感した一年でした。滞在拠点を通じた活動が、アーティストと地域、そして文化資源を有機的につなぐ役割を果たし、新たな価値を生み出す可能性を示しています。

今後もこのプログラムを通じて、アーティストの創作活動を支えるとともに、横浜の文化的な多様性をさらに広げていくことを目指していきます。

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
経営企画・ACYグループ

ACYアーティスト・フォローアップ助成

概要　「ACYアーティスト・フェローシップ助成」に採択されたアーティストの、助成対象期間後の活動を支援するため、「ACYアーティスト・フォローアップ助成」を実施しています。本助成では、対象者が横浜市内で開催する展覧会、公演、上映会などの事業に対し、助成金の交付をはじめとする多様なサポートを行っています。
2024年度は、前年度のアーティスト・フェロー4名が横浜市内で作品を発表しました。

加藤立

Photo：加藤立

個展「未来のポートレイト」

日時：2024年6月13日（木）～ 6月23日（日）
10:00～18:00（6月17日(月)は休館）
会場：横浜市民ギャラリー 展示室B1F

私道かぴ

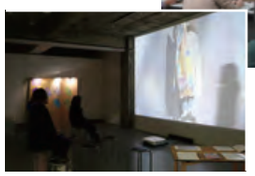
Photo：菅原康太

演劇版《団地のこえ》

日時：2025年1月18日（土）
13:00～、15:00～
会場：左近山アトリエ131110

坂本夏海

Day1　トークの様子



Day2　上映の様子

《Dismantling Motherhood》
Day1　上映会＋トークイベント

トークゲスト：森祐美子（認定NPO法人こまちぷらす理事長）
日時：2024年11月30日（土）14:00～16:00
会場：フォーラム（男女共同参画センター横浜）
セミナールーム3

Day2　上映会

日時：2024年12月1日（日）14:00～19:00
会場：アートスタジオ アイムヒア

山岡瑞子

Photo：中川達彦

「Maelstrom（大混乱）から始まる哲学対話」
上映会＋哲学対話

ファシリテーター：河野哲也（哲学者）
森本美花（NPO法人ゲートキーパーTONARINO理事長）
日時：2024年11月17日（日）14:30 ～17:30
会場：Murasaki Penguin Project Totsuka

発行	公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
企画・編集	同アーツコミッション・ヨコハマ担当　小原光洋、森絵里花
編集・執筆・デザイン	有限会社スタジオニブロール
協力	鎌田友介、工藤春香、敷地理、永田康祐、野村眞人
	渡辺篤（アートスタジオ アイムヒア）
	若林拓哉（ARUNŌ -Yokohama Shinohara-）
	関口春江、大谷浩之介（Co-coya）
	熊谷恵美子、森智佳子（左近山アトリエ131110）
	黒田杏菜、David Kirkpatrick（Murasaki Penguin Project Totsuka）

＊本誌は、横浜市にぎわいスポーツ文化局のアーツコミッション・ヨコハマ補助金で作成しています。

令和6年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業　文化庁

発行：2025年3月14日

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
〒231-0023 横浜市中区山下町2
産業貿易センタービル1階

Email acy@yaf.or.jp
URL https://acy.yafjp.org/

敷地 理
「a butterfly swimming under the water」プレゼンテーションの様子
（2024年8月、MPPT）

永田 康祐
ワークショップの様子（2025年2月、Co-coya）
Photo：工藤葵

野村 眞人
《吉日再会》（2024年11月、アートスタジオ アイムヒア）
Photo：レトロニム